飛鳥井雅経『鳥羽百首』「五月雨」「月」「紅葉」「雪」歌注釈

稲葉　美樹＊

『鳥羽百首』は飛鳥井雅経の家集『明日香井集』の最初に配されている。建久九年（一一九八）に詠作が開始されたことが知られ、詠作時期が判明する雅経歌の最初の作品である。本稿では、『鳥羽百首』の「五月雨」九首、「月」九首、「紅葉」九首、「雪」一〇首の計三七首について、校異、他文献、現代語訳、本歌、参考歌、語釈、補説をまとめたものである。

キーワード：　飛鳥井雅経、『明日香井集』、『鳥羽百首』

はじめに

飛鳥井雅経の家集『明日香井集』は、栄雅（飛鳥井雅親、雅経の末裔。応永二三年〔一四一六〕―延徳二年〔一四九〇〕）の識語によって、雅経の孫雅有の撰により、永仁二年（一二九四）春頃成立したと知られる。一六七二首を上下二巻に収める。構成は、上巻には定数歌を、百首歌・五十首歌・その他の定数歌の順に、さらにそれぞれの中で詠作順に収めている。下巻には、前半に小規模な歌会・歌合歌を詠作順に配し、後半に四季・恋・雑から成る部類歌を収める。伝本は、二〇本以上現存するが、「現存諸本は、語句・歌の順序に小異がある程度で、すべて同系統と考えられる。」[1]とされる。現存最古写本は、冷泉家時雨亭文庫蔵本であるが、これを祖本とするとされる日本大学総合図書館蔵本（九一一・一四八・A・九三）に比して三四四首の欠脱があるものの、日大本の増補と見られる箇所もあるとされる[2]。また、伝本の中には、栄雅の識語の後に文明一五年（一四八三）の宋世（飛鳥井雅康、栄雅の弟で、その猶子となる）の奥書を有するものも複数ある。

本稿で扱う『鳥羽百首』は、『明日香井集』の最初に配されている。「建久九年五月廿日始之毎日十首披講之」という注記を持ち、雅経二九歳の時の詠であることが知られる。詠作時期が知られる雅経歌の中で最も早い時期の作である。

雅経の父頼経は、源義経に同心した罪科により、文治五年（一一八九）伊豆に流された。雅経もその後、時期は明らかでないが鎌倉に下向し、在住していたが、後鳥羽院の命により建久八年（一一九七）二月に上洛した。雅経は正治二年（一二〇〇）以降、後鳥羽院歌壇に加えられるが、『鳥羽百首』はそれに先立つ作品である。立春・花・郭公・五月雨・月・紅葉・雪・歳暮・恋・述懐の十題。各題十首だったのであろうが、五月雨・月・紅葉・歳暮は各九首、郭公は七首の計九三首しか現存しない。他の歌人に同じ題の作は見られず、私的な作と考えられる。前稿[3]では、『鳥

＊いなば・みき、埼玉大学教養学部非常勤講師、日本中世文学

(1)『私家集大成』（日本文学ｗｅｂ図書館、古典ライブラリー）『明日香井集』解題（有吉保氏）。

(2) 冷泉家時雨亭叢書『中世私家集六』（二〇〇二年六月、朝日新聞社）解題（久保田淳氏・小林一彦氏）。

(3)「飛鳥井雅経『鳥羽百首』『立春』『花』『郭公』歌注釈」（『埼玉大学紀要　教養学部』第五四巻第一号、二〇一八年九月）。

羽百首』の最初の三題、すなわち、立春・花・郭公題の計二七首の注釈を行った。本稿ではそれに続く五月雨・月・紅葉・雪の四題の計三七首、『明日香井集』二八～六四の注釈を行う。

凡例

一、本稿は、日本大学総合図書館蔵本（九一一・一四八・A・九三）を底本とする『私家集大成』（日本文学ｗｅｂ図書館、古典ライブラリー）の『明日香井集』により、注釈を試みたものである。

二、本文について、漢字と仮名の区別は底本のままとしたが、読解の便を考慮して次の処置を施した。

・仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一し、濁点を補った。

・底本本文に何らかの問題があって解釈に支障がある場合には、『新編国歌大観』（日本文学ｗｅｂ図書）を参照して改め、原表記等をカッコ内ルビで示し、【語釈】欄で説明した。

三、歌頭に『新編国歌大観』の番号を付した。

四、注釈には、【校異】【他文献】【現代語訳】【本歌】【参考歌】【語釈】【補説】の項目を立てて記した。

五、【校異】は栄雅識語を有する、冷泉家時雨亭叢書『中世和歌集六』所収『明日香井集』（「冷」と略記する）、宮内庁書陵部蔵本（五〇一・一〇〇、仮に「書Ａ」と略記）、および宋世奥書も有する宮内庁書陵部蔵本（二六六・七〇九、仮に「書Ｂ」と略記）の異文を、仮名遣いや送り仮名などのような解釈に影響しないと思われるものを除いて、底本本文ともに原態本文で示した。[4]

六、【他文献】は、当該歌が勅撰集・私撰集・他の私家集などに入っている場合に、その所在と校異を示した。

七、【現代語訳】は、本文の各語に即しつつ、わかりやすさに留意した。

八、【本歌】には、本歌取りにおける本歌と認定される歌を掲げた。

九、【参考歌】には、解釈などの参考になると思われる歌を掲げた。

一〇、【語釈】では、語句を抜き出して、解釈や解説を加えた。

一一、【補説】では、表現の特性、先行歌との関係、私見などを記した。

一二、引用和歌資料は特に断らない限り、『新編国歌大観』によった。

注釈

五月雨

二八　さみだれはすだくかはづのこゑながらさわぎぞまさるゐでのうきくさ

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　五月雨は、集まって鳴く蛙の声とともにいっそう音を立て、降り注ぐ五月雨にいっそう乱れ動く井出の浮草であるよ。

【本歌】

みがくれてすだくかはづのもろごゑにさわぎぞわたるゐでのかはなみ（『後拾遺集』巻二、春下、一五九、良暹『弘徽殿女御歌合』一三、結句「ゐでのうき草」）

（4）宮内庁書陵部蔵本はいずれも、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースの画像による。

【参考歌】
みがくれてすだくかはづのこゑながらまかせてけりなゐでのをやまだ
（『殷富門院大輔集』七・『風雅集』巻三、春下、二六九、結句「小田のなはしろ」）
【語釈】
○すだく―多く集まる意。平安時代以降は、虫や鳥などが群がって鳴く意にも用いられた。ここでは後者。
○こゑながら―「ながら」は接尾語で、…のままの意。蛙が集まって鳴いている声は続いていて、そこに五月雨が降る音が加わることを表現している。この表現は当該歌以外には参考歌欄に示した殷富門院大輔歌にしか見られない。
○さわぎぞまさる―「さわぎ」は「五月雨は」を受けて、ざわざわと音を立てる意であるとともに、「ゐでのうきくさ」に続く文脈では、乱れ動く意。「まさる」は増大する意。
○ゐで―山城国の歌枕。現在の京都府綴喜郡井出町。山吹・蛙の名所。
【補説】　田村柳壹氏は、本百首の本歌取について論じた中で、「本歌から取った句の位置を変えずに、二句乃至二句と数文字取っている例」の一つに当該歌を挙げた上で、春→夏「というように、主題を転換させ、同題を避けるように配慮されていることがわかる」と指摘している。[5] 確かに、第二句「すだくかはづの」、第四句中の「さわぎぞ」のほか、歌合本文に従うと結句「ゐでのうきくさ」を取っていることになり、取り過ぎといえるであろう。しかし、当該歌で、本歌の景を取り込みながら五月雨詠へと転じている点は巧みなのではないだろうか。
　また、「すだくかはづのこゑながら」という表現は、当該歌と参考歌欄に示した殷富門院大輔歌の二首にしか見られず、蛙の声はそのまま聞こえていて、状況に変化が生じるという趣向は、殷富門院大輔歌から学んだ可能性が考えられる。
　なお、『鳥羽百首』は雅経の百首歌の中で最も体言止めの歌が多く、九三首中六三首に見られるが、五月雨題の歌はすべて体言止めである。

二九　さみだれはくものしがらみこえにけりそらよりあまるあまのかは水
【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　五月雨は雲のしがらみを越えてしまったのだな、空から余ってこぼれ落ちて来た天の川の水である。
【本歌】
わが袖に露ぞおくなる天河雲のしがらみ浪やこすらん
（『後撰集』巻六、秋中、三〇三、よみ人知らず）
【参考歌】
あまのがはくものしがらみこえにけりはなちりつもるをはつせのやま

(5) 田村柳壹氏『後鳥羽院とその周辺』一九九八年一一月、笠間書院、二三一ページ。初出「藤原雅経の和歌活動とその詠歌をめぐって―特に、建仁元年新古今集撰集下命までを中心に―」（『中世文学』第二二号、一九七七年一〇月）。以下、同氏の説の引用は同書による。本歌取については二三〇ページから二三四ページ、新風歌人の作からの摂取については二三四ページから二三六ページで論じられている。

（『江帥集』三八・『続詞花集』巻二、春下、七二）[6]

【語釈】

○くものしがらみ―雲で作ったしがらみ。天の川にかかった雲をしがらみに見立てた表現。「しがらみ」は、杭を打ち並べて、そこに小枝などを渡して、川の流れをせき止めるもの。「くものしがらみ」の雅経と同時代以前の作例は、本歌および参考歌を含めて平安時代に四例、同時代には寂蓮・後鳥羽院・鴨長明・惟明親王に一例ずつしか見られない。

○そらよりあまる―天の川の水がしがらみを越え、余って空からこぼれ落ちた。この表現を用いた歌は他にない。

【補説】 田村柳壹氏は、本百首の本歌取について論じた中で、「本歌の趣向を拡張・深化させながら一首を構成しつつ、秀句的表現を開拓している歌がみられる」と述べ、一例としてこの歌を挙げている。また、「そらよりあまるあまのかは水」を秀句的表現とし、「雅経の秀句好みの一面が端的にあらわれている」と述べている。

『後撰集』歌のほか、参考歌欄に示した大江匡房歌の第二句・第三句が当該歌と同一で、「あまのがは」も一致している。匡房歌も本歌とすべきかと思われるが、そうであれば明らかに取り過ぎであろう。天の川にかかった雲をしがらみに見立て、そのしがらみを水が越えるとする発想は先行する二首によるものの、『後撰集』歌は涙を、匡房歌は花が散り積もる様を、天の川の水がしがらみを越えたと表現しているのに対し、雅経歌では五月雨がしがらみを越えて天からこぼれ落ちて来たものと歌う。降るのが雨であるため天の川との結びつきは先行歌よりも密接になるものの、意外性は乏しいのではないかと思われる。

三〇　さつきよはのきのしづくのおとすみてのどかにふくるあま雲のそら

【校異】 さつきよは―さ月には（書B）

【他文献】 なし

【現代語訳】 五月の夜は、軒から落ちる雫の音が澄んでいて、静かに更けて行く、雨雲に覆われた空である。

【参考歌】

やすらひてみるほどもなきさつきよをなにをあかずとたたくくひなぞ（『大斎院前の御集』一七一）

【語釈】

○さつきよ―五月の夜。当該歌以前の作例は、参考歌欄に示した選子内親王歌のみで、その後の作例も少ない。

○のどかにふくる―「のどかに」は平穏で静かな様子をいう。この表現の作例は当該歌以前はない。

○あま雲のそら―雨雲がかかっている空。これも当該歌以前の作例はない。

【補説】 松村雄二氏は「雅経の詩心」について「自然の音や変化に耳すまし、その流動する相を歌の上に定着してゆく」[7]と指摘しており首肯される。雅経には、特に嵐を詠んだ歌が多く（『明日香井集』一六七二首

---

(6) 匡房歌は『続詞花集』では、天理図書館蔵本（九一一・三・イ四七）を底本とする『新編国歌大観』で第三句を「たえにけり」とする。これでは解しにくいため、国立歴史民俗博物館蔵本を底本とする『続詞花和歌集新注　上』（鈴木徳男氏、青簡社、二〇一〇年一二月）に従った。

(7) 「飛鳥井雅経と藤原秀能」（『国文学　解釈と鑑賞』第四四巻一〇号、一九七九年九月）。

中六九首)、またその多くが聴覚によって嵐を捉えた作であるという特徴が見られる。当該歌では五月雨を、雫が軒から落ちる音で表現している。雨垂れを澄んだ音色として耳を傾けているために、雨雲に覆われた空であっても重苦しくはなく、静かに夜が更けて行くと感じるのであろう。次の三一と三二も聴覚による作である。

三一　さ月やみまどうちあかすあめのおとにこたへておつるそでのたま水

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】五月の夜の深い闇の中で、一晩中窓を打つ雨の音に答えてこぼれ落ちる袖の玉水である。

【参考歌】

いたづらにけふもすぎぬとつぐるかねにこたへておつるわがなみだかな

(『拾玉集』三一八二)

とやまよりしかのねおくる秋かぜにこたへておつるはぎのしたつゆ

(『秋篠月清集』五二九)

秋の夜はまどうつあめに夢さめてのきばにまさる袖のたまみづ

(『六百番歌合』秋、三六五、藤原有家)

【語釈】

○さ月やみ―五月雨が降る頃の夜の暗闇。

○うちあかす―「うち」は雨が窓をたたく意、「あかす」は、朝までし続ける意、したがって「うちあかす」で一晩中雨が窓をたたいている意と解した。「まどうちあかす」という表現は、当該歌以前に作例が見られない。

○こたへておつる―窓をたたいて落ちる雨の雫に呼応してこぼれ落ちる意。当該歌以前の作例は、参考歌欄に示した良経歌にしか見られない。

○袖の玉水―「玉水」は水滴を玉に見立てたもの。ここでは涙のこと。「袖の玉水」の当該歌以前の作例は、参考歌欄に示した有家歌にしか見られない。

【補説】田村柳壹氏は、本百首の特徴の一つとして「次に、本百首中で注目されるのは、雅経が比較的近年に詠出された先人の歌を意識して詠んだと考えられる歌がみられることである。それら先行歌との類似や重なり合いの現象には、①本百首の詠作された建久期前後に流行の兆しを見せる表現を敏感に受けとめ、それを先取り的に詠みこんでいること、②良経・慈円・定家など、いわゆる新風歌人の作品に親しみ、特に、彼らが詠出した秀句的表現を見出して、それを学びとってゆこうとする詠歌姿勢の窺い知れること、などの傾向を認めることができる」と指摘し、その例中に当該歌と参考歌欄に示した慈円・藤原良経歌を挙げて、『『雨の音に答へて落つる袖の玉水』(略)など雅経は先人の秀句的表現を積極的に学び用いている」と述べている。しかし、良経歌は「南海漁夫百首」中の一首で、「南北百番歌合」跋文に「建久五年仲秋」とあるのでこれ以前に詠まれたと知られるが、慈円歌は「厭離欣求百首」中の一首で、これは跋文によると承元三年(一二〇九)の作なので、雅経歌が先行する。したがって、雅経は「答へて落つる」という表現を良経歌から学んだ可能性が考えられるが、窓を雨が打つ夜に涙を流すという一首の発想は主として有家歌から得ているのではないかと考えられる。有家歌では秋の夜のもの寂しい思いに流す涙、雅経歌では五月雨の時期の深い闇に閉ざされた中での鬱屈した思いに流す涙を詠む。

三二　はつせやまいりあひのかねのおとまでもうちしめりたるさみだれのころ

【校異】　なし

【他文献】『老若五十首歌合』一二六。『明日香井集』八八一に重出。

【現代語訳】　初瀬山の入相の鐘の音までが、湿った感じになる五月雨の頃である。

【語釈】

○はつせやま―大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市初瀬。

○いりあひのかね―日没の頃に寺でつく鐘。ここでは初瀬にある長谷寺の鐘。

【補説】　五月雨の季節で湿度が高いために、鐘の音までが湿ったようなくぐもった音に聞こえるという歌。音から湿度を感じ取る点には、前述のように聴覚によって自然を捉えることに一つの特徴を持つ雅経らしさがあるものの、特に技巧などは見られない。『老若五十首歌合』には、既に詠んでいたこの歌を入れたものと思われ、雅経にとってある程度自信のある作だったのであろう。しかし、「神まつる卯月まちいでてさく花の枝もとををにかくるしらゆふ」(藤原定家)と番えられて負けている。なお、同歌合には勝負付はあるが、判詞はない。

三三　さみだれの日かずのほかやさをしかのつめだにひちぬやまがはのみづ

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　五月雨の日数と水量とは別なのか、牡鹿の爪すらつからないほど浅い、山川の水である。

【本歌】

さをしかのつめだにひちぬ山河のあさましきまでとはぬ君かな

(『拾遺集』巻一四、恋四、八八〇、よみ人しらず)

【語釈】

○日かずのほか―当該歌以前の作例はなく、解しにくい。日数とは別の意で、梅雨入りしてからの日数は経過しているものの、上流である山中の川の水量は増していないことを表現していると解した。

○つめだにひちぬ―爪すらつからない。「ひつ(漬つ)」は水につかる意。

【補説】　田村柳壹氏は、本百首の本歌取について、「勅撰集所載歌を本歌とした作品をみて先ず第一に気付くのは、本歌から取った句の位置・分量という点からいって、本歌を取り過ぎているように思われる場合が少なくないということであろう」と指摘し、当該歌を「本歌から取った句の位置を変化させてはいるものの、本歌から三句そっくり取り用いている歌である」と述べた上で、恋から夏へ「主題を転換させ、同題を避けるように配慮されていることがわかる」とする。恋歌を自然詠に転じていることと関わるが、本歌では「浅」を導く序詞であった「さをしかのつめだにひちぬ山河の」を、雅経歌では梅雨時なのに川の水が浅いという実景として詠んでいる。次の三四も川を詠む。

三四　うぢがはのはやせにめぐるみづぐるまそらよりうくるさみだれのころ

【校異】 はやせにめぐる―はやせにくる（書A）
【他文献】 なし
【現代語訳】 宇治川の早瀬で回っている水車が、空から雨水を受けている五月雨の頃である。
【参考歌】
はやきせにたたぬばかりぞみづぐるまわれもうき世にめぐるとをしれ
（『金葉集』三奏本巻九、雑上、五六一、行尊・『金葉集』二度本巻九、雑上、五六一）
さゆる夜ははや瀬にめぐるをしかものこほらぬ床もいかがくるしき
（『壬二集』六四）
【語釈】
○うぢがは―山城国の歌枕。琵琶湖に発し、瀬田川を経て、宇治市域を流れ、淀川となる。
○はやせにめぐる―「はやせ」は川の流れが浅くて早いところ。「はやせにめぐる」という表現の作例は、当該歌以外は参考歌欄に示した藤原家隆歌にしか見られない。
○みづぐるま―水力で回る車。米などをつく。和歌に詠まれる例は少なく、勅撰集では参考歌欄に示した一首だけしか見られない。当該歌に先行する作例は、八例ほどである。
【補説】 宇治川の早い流れによって勢いよく回っている水車に、五月雨が降り注ぐ景を詠む。流れが早いのは、三三とは対照的に梅雨も原因のひとつとなっているのかもしれない。「うくる」という語から判断すると、回転する水車に雨水が吸い込まれて行くように見えるのではないだろうか。つい、見入ってしまうような光景なのであろう。

三五　くもまよりいでぬ日かげのほのみえてさてしもはれぬさみだれのそら
【校異】 なし
【他文献】 なし
【現代語訳】 雲に隠れて出てこない太陽が、雲間からかすかに見えて、その状態のままで晴れない五月雨の空である。
【語釈】
○くもまより―雲の間から。「ほのみえて」にかかる。
○いでぬひかげ―姿を見せない太陽。この表現の作例は当該歌以外にない。
○ほのみえて―「ほのみゆ（仄見ゆ）」はかすかに見える意。
○さてしも―そのままの状態で。
【補説】 雲の間からほんの少しだけ太陽が見えるものの、その状態が続き、一向に晴れない梅雨空を詠む。すっきりしない梅雨時らしい空の様子を描き出している。次の三六では雲間の月を詠む。

三六　さみだれのおなじくもまにあきを見てひとりはれたるおもかげの月
【校異】 なし
【他文献】 なし
【現代語訳】 五月雨を降らせているのと同じ雲の間に、私は秋を感じて、その面影の月だけが晴れている。
【参考歌】

月ならであまの河原のこほる夜やおなじ雲まの鏡なるらん
（『六華集』第四、冬、一三六三、藤原定家）
【語釈】
○おなじくもまに―今現在五月雨を降らせている雲と同じ雲の間に。「おなじくもま」という表現の作例は少なく、雅経と同時代歌人の作は参考歌欄に示した定家歌しか見られない。また、定家歌は『六華集』にしか見えず、詠作時期は不明。
○あきを見て―解しにくいが、結句の「おもかげの月」と合わせて考え、梅雨空に幻想の秋の空を見ている意と考えておく。
○おもかげの月―「おもかげ」は、目の前にないものがまるで存在するかのように目の前に見える、そのありさま。「おもかげの＋名詞」については、前稿九歌の語釈を参照されたい。「おもかげの月」という表現の作例は当該歌以前にはなく、その後も少ない。
【補説】 梅雨空に秋の空を幻視し、そこには現実には見えない月が晴れているという歌と考えられるが、どんよりとした梅雨空と澄んだ秋の空を重ねるのはいささか唐突であろう。次の三七から月題となるため、五月雨の中に秋の気配を見出して関連づけたかとも考えられるが、五月雨の季節から秋の訪れまではまだ日数があり、不自然に感じられる。

月

三七　ほのめかすとばたのいな葉うちなびきつゆにかげあるゆふづくよかな
【校異】 なし
【他文献】 なし
【現代語訳】 ほのかに見える鳥羽田の稲葉がなびき、葉の上に置いた露に光を宿している夕月であるよ。
【語釈】
○ほのめかす―和歌では多くの場合恋歌に用いられ、思いをそれとなく相手に伝える意だが、ここでは、ほのかに現れる意の「ほのめく」の他動詞形で、ほのかに姿を見せる意と解する。「穂」を掛け、「稲」の縁語。
○とばたのいなば―「とばた」は鳥羽あたりの田で、山城国の歌枕。鳥羽は、現在の京都市伏見区。「とばたのいなば」という表現の当該歌以前の作例はない。当該歌より後には、後鳥羽院・慈円らが詠んでいる。また、雅経にはもう一例、建暦二年（一二一二）五月の『内裏詩歌合』に「かりのくるとばたのいなばほのかにもなみぢくれゆくよどの河ぎり」（『明日香井集』一一八四）がある。
○ゆふづくよ―夕方空にかかっている月で、陰暦の上旬の月。
【補説】 夕方になってほの暗いため、はっきりとは見えない稲葉が風になびいていて、その稲葉に置いた夕露に月の光が映っているという景を描く。夕月夜であることから、この月は三日月で光が弱いと考えられる。薄暗い中で、露に映った月の光だけが輝くさまが印象的である。

三八　それもみないづべきほどのあるものをまつこゝろにやいざよひの月
【校異】 なし
【他文献】 なし
【現代語訳】 月には皆、姿を現すはずの時分があるのに、十六夜の月が昇ることをためらっているように思われるのは、月の出を待つ心のせい

なのだろうか。

【参考歌】

あさ日まつかずにいる身ぞたのもしきいづべきほどははるかなれども

（『唯心房集』一六一）

【語釈】

○それもみな―「それ」は月を指す。

○いづべきほど―月齢によって、月の出の時分が決まっていることをいう。この表現の作例は少なく、当該歌以前には参考歌欄に示した寂然歌にしか見られない。ただし、内容面での関わりはなく、影響関係があるかは不明。

○いざよひの月―陰暦十六日の月。ためらう意の「いざよひ」を掛ける。

【補説】 十六夜の月の出を、今か今かと待つ気持ちを詠む。少々理屈っぽい歌ではあるが、待っている物事の訪れが遅く感じるのは誰にでも経験のあることで、詠まれている心情は理解しやすい。

三九　しかばかりまつにはくれぬそらながらいづればふくるあきのよの月

【校異】 なし

【他文献】 なし

【現代語訳】 これほどまでに待っている時にはなかなか暮れない空なのに、昇ればすぐに更けてしまう秋の夜の月である。

【語釈】

○しかばかり―副詞で、こんなにまでの意。

○まつにはくれぬ―暮れるのを待っている時にはなかなか暮れない。当該歌以外には作例が見られない。

○そらながら―空であるのに。『拾玉集』と『正治初度百首』に四例ずつ見られるなど、新古今歌人が比較的多く用いた表現。

○いづればふくる―月が昇ればすぐに夜は更けてしまう。これも他に作例が見られない。

【補説】 待っている間は長く感じられるという点で、三八と類似の発想の歌。月が昇るのを待っていた間はなかなか暮れなかったのに、月が昇るとずっと見ていたいという気持ちに反してすぐに夜が更けてしまうように感じる心情を平明に表現している。「まつにはくれぬ」と「いづればふくる」が対句のようになっており、なめらかな調子を生んでいる。

四〇　はれやらで山の葉たかく成りにけり雲よりいづるあきのよの月

【校異】 なし

【他文献】 なし

【現代語訳】 完全には晴れず雲があるために山の端が高くなってしまった。その雲から姿を見せる秋の夜の月である。

【本歌】

月みれば山のはたかくなりにけりいでばといひし人にみせばや

（『後拾遺集』巻一五、雑一、八五六、江侍従）

【語釈】

○はれやらで―完全には晴れなくて。「やる」は補助動詞で、動作をし終える意を表す。

○山の葉たかく―「山の葉」は「山の端」で山の稜線。それが高くなったとは、ちょうど稜線の辺りに雲がかかっているために、いわば山がか

さ上げされた状態になっていることをいう。
○雲よりいづる―雲がかかっているために、月が山の端から昇るのではなく、雲から現れることをいう。この表現の作例は少ないが、『拾玉集』に三例見られる。
【補説】 田村柳壹氏は、この歌を三三歌同様本歌を取り過ぎているものの、雑から秋へ主題を転換させている例としている。本歌から取ったのは「山のはたかくなりにけり」で、本歌と同じ第二句・第三句に置いているため、取り過ぎということになろう。しかし、本歌は月が山の端から離れて高く昇った様子を詠んでいる。一方、雅経歌は山の端にかかった雲の上から現れた月を詠んでおり、景そのものが異なっている。雅経は本歌の句から、「かさ上げされた山の端」という情景を着想したのではないかと思われる。雲があるばかりにより高く昇らないと月を見られず、ようやく姿が現れた喜びが感じられる。

四一　ながむればふけゆくまゝに雲はれて月すみはつるあきかぜのそら
【校異】 ながむれば―なかむは（書A）　あきかぜのそら―風の空（書A）
【他文献】 なし
【現代語訳】 眺めていると、更けて行くにつれて雲が晴れて、月がすっかり澄んだ、秋風の吹く空である。
【本歌】
ながむれば更けゆくままに雲晴れて空ものどかにすめる月かな（『金葉集』二度本、異本歌、六七七〔巻三、秋、二〇一の次〕、藤原忠隆）
【参考歌】
こころなくあまのいはとのおしあけて月すみはてぬこやの池水（『出観集』四一六）
月きよみ羽うちかはしとぶ雁のこゑ哀なる秋風の空（『拾遺愚草』六八四・『玄玉集』巻三、天地歌下、一八一）
【語釈】
○月すみはつる―「月すみはつ」という表現は、当該歌以外は参考歌欄に示した覚性法親王（大治四年〔一一二九〕―嘉応元年〔一一六九〕）歌にしか見られない。
○あきかぜのそら―当該歌以前の作例は少なく、参考歌欄に示した定家歌など三例しか見られない。
【補説】 田村柳壹氏は、本歌を取り過ぎている例とした上で、本歌が『澄める月』に対する作者の主観を結句で詠嘆表現とした作」であるのに対し、雅経歌は「自然事象の変化を起こさせた原因としての『秋風』を結句に暗示的に表現している」、「作者の主観を表現の上に直叙せず、『秋風の空』と体言止めにして余情的表現による詠嘆としている」と述べる。本歌から上三句を取っており、澄んだ月を詠む点も本歌と同じで、異なるのは「秋風」が詠まれる点だけである。しかし、本歌の「空ものどかに」は風のない穏やかな様子であるが、雅経歌は、田村氏が述べるように秋風が吹いているために澄みきった月である点が異なる。また、「月すみはつ」「あきかぜのそら」という作例が少ない表現を用いたことにも新しさがあろう。

四二　あはれにもたもとにやどるひかりかなつきやなさけをおもひしる
【校異】 たもとにやどる―たもとやとる（書A）

【他文献】 なし
【現代語訳】 心打たれることに、袂に宿る光であるよ。月は情けというものを知っているのであろうか。
【参考歌】
はぎのはのはなき末の露の色月のなさけは猶おかれけり
（『拾遺愚草員外』三五四）
袖にゐる涙のつゆをたよりにてたもとにやどる秋のよの月
（『拾玉集』三四七）
【語釈】
○たもとにやどる―袂の涙の露に、月の光が宿っている意。作例は少なく、当該歌に先行するかと思われるのは、参考歌欄に示した慈円歌だけである。
【補説】 露に宿る月の光を、月の情けとする発想は定家歌と共通しており、これから学んだ可能性も考えられる。物思いをしてこぼした涙の露に月が映っているのを見て、月の思いやりを感じ取り、わずかな慰めを得ているという平明な作。

四三　おもかげをなにゝわすれん秋のすゑながめなれたる有曙のつき
【校異】 なし
【他文献】 なし
【現代語訳】 その面影を何によって忘れることがあろうか。秋も末になって眺めることに慣れた有明の月であるのだから。
【語釈】
○おもかげ―月の面影。心に残っていて思い出される月の様子。
○秋のすゑ―新古今歌人が多用した流行表現。雅経も他に二首に用いている（『明日香井集』一〇一一・一二三三）。
【補説】 下三句により、秋の間中、毎晩のように月を眺めていたことが知られる。そのため月の姿は目に焼き付いていると月への愛着を詠み、秋が去ってその月を見られなくなること、ひいては秋が去ることを惜しむ気持ちを歌う。

四四　おもふことこれぞたがはぬあきの月我ゆゑはるゝそらならねども
【校異】 おもふこと―早事（書B）　これぞたがはぬ―これそなかはぬ（書B）
【他文献】 なし
【現代語訳】 これが私が思っているのと違わない秋の月である。私のために晴れている空ではないけれど。
【語釈】
○これぞたがはぬ―秋の月として自分が思い描いているのと寸分たがわぬ。他にこの表現の作例はない。
○われゆゑはるゝ―これも他に作例がない。
【補説】 自分がイメージしている通りの澄み切って美しい月を見ることのできた喜びを歌う。空が自分のために用意してくれたわけではないのは言うまでもないことであるが、このように言いたいほど理想的な景なのであろう。ただし、澄んで美しい月であることはわかるが、具体性を欠く。

四五　むねのうちにたのみもふかき月よりもまづこゝろすむ秋のよのそら

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】胸の中で期待する思いも深い月よりも、眺めているとまず心が澄んでくる秋の夜の空である。

【参考歌】

月ゆゑにあまりもつくす心かなおもへばつらし秋のよの空

（『拾遺愚草』六七七）

【語釈】

○たのみもふかき―「たのみ」は期待すること。「たのみもふかき」は澄んで美しい月が昇ることを心の底から期待する意。

○秋のよのそら―参考歌欄に示した定家歌が初出かと思われる新しい表現。雅経は当該歌のほかに三首に詠んでいる（『明日香井集』一二七・三三七・一三五九）。

【補説】月の出を待っているが、秋の夜の空を眺めていると、澄んだ月が昇るより先に自分の心が澄んでくるという歌。月が出ていなくても、さわやかな秋の空を眺めているだけで心が澄むという点に新しさがあろうか。しかし、月題であるのに月が主題ではない点は問題であろう。

紅葉

四六　とやまよりこゝろにふかきうすもみぢしぐれのおくのおもひやられて

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】外山を見るだけで心に深い印象を与える薄紅葉である。時雨が降っている奥の紅葉はさぞ鮮やかであろうと思いやられて。

【参考歌】

山めぐるしぐれのおくの紅葉ばのいく千しほとかこがれはつらん

（『拾遺愚草』一五四七）

【語釈】

○とやまより―「とやま」は人里に近い山。「より」は動作の出発点をあらわす。ここでは、外山の紅葉を見ることを出発点として、その時点で既に心に深く印象づけられていることをいう。

○うすもみぢ―完全には紅葉しておらず、うっすらと色づいた木の葉。新古今時代に作例が増加した語。

○しぐれのおく―時雨が降っている奥。「とやま」と対応し、山深い場所にある紅葉。「しぐれのおく」という表現の作例は、当該歌以前にはなく、当該歌より後には参考歌欄に示した定家歌に一例だけ見られる。(8)

【補説】人里近い山ではまだ紅葉が始まったばかりの頃の心境を詠む。外山のうっすらと色づいたばかりの紅葉でも心惹かれ、時雨の奥の紅葉はさぞ色鮮やかであろう思いをはせる。「深き」と「薄（紅葉）」、「外山」

(8)「しぐれのおく」は取り上げられていないが、寺島恒世氏に「歌語『奥』考」（初出『国語国文』第五六巻、第一〇号、一九八七年一〇月・渡部泰明氏編『秘儀としての和歌―行為と場』〔一九九五年一一月、有精堂出版〕所収）がある。

と「奥」という語の対応が見られ、紅葉の色彩の濃淡や景の奥行きを感じさせる構成となっている。

四七　かはりゆくすそのゝはぎのした葉よりこずゑにつづく秋のいろかな

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　変わって行く裾野の萩の下葉から梢へと続く、秋の色であるよ。

【語釈】

○かはりゆく―変わって行くのは、裾野の萩の下葉の色。次第に紅葉して行くことをいう。

○こずゑにつづく―まず萩の下葉が、続いて木々の梢が紅葉して行く。

【補説】　裾野の萩の下葉が徐々に色づき、続いて木々の梢も紅葉していく様を、秋の色が萩の下葉から梢に続くと表現した。紅葉の範囲が少しずつ広がり、やがて一帯が赤く染まるという平面での拡大と、萩の下葉から木々の梢へという下から上への立体的な拡大の両方が感じ取られる。

四八　よそにだに見でやはすぎしはゝそはらきりのうちまでおもひいる覧

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　遠くからでも見ないで通り過ぎたなどということがあろうか。柞の黄葉を深く思って、霧の中まで入っていくことであろう。

【語釈】

○よそにだに見でやはすぎし―解しにくい。「やは」は反語の意に用いられることが多く、ここでも反語と解される。「見でやはすぎし」として、見ずに通り過ぎたことなどない意と解釈したが、『新編国歌大観』では「見てやはすぎじ」とする。これならば、見て通り過ぎないということはないだろうの意とになり、文脈上不自然なのではないかと感じられる。

○はゝそはら―「ははそ」はクヌギ・コナラなどブナ科の落葉樹の総称。黄褐色に紅葉する。

○おもひいる覧―「おもひいる」は深く思って入る意、「覧」は助動詞「らむ」で現在推量。

【補説】　黄葉した柞原に惹かれる思いを歌った作であるが、解しにくい。第二句「て」と「し」が濁音か清音か判断しづらい。「し」とすると過去の助動詞「き」の連体形、「じ」とすると打消し推量となるが、結句「らん」は現在推量で、時制に齟齬が生じる。あるいは「らん」は原因推量で、どうして霧の中まで深く思って入ってしまうのだろうの意か。

四九　秋やまのいろをこゝろにそめかへてながめすてゝきみねのしら雲

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　秋山の紅葉した色を自分の心に染め移して、物思いに沈んで峰の白雲を眺めることはやめた。

【参考歌】

あきよただながめすててもいでなましこのさとのみのゆふべとおもはば
（『続古今集』巻四、秋上、三五八、藤原定家・『六百番歌合』三八三・『拾遺愚草』八三二）

【語釈】
○秋やまのいろをこゝろにそめかへて―「秋やまのいろ」は紅葉の赤色。「こゝろにそめかへて」は紅葉の赤色を心に焼き付けること。結句の「みねのしら雲」の白から赤へ染め変えた。
○ながめすてゝき―物思いに沈んで眺めることをやめた。ここで切れて四句切。「ながめすつ」という表現の当該歌以前の作例は、参考歌欄に示した定家歌にしか見られない。

【補説】「ながめすてゝき」という強い表現が印象に残る作。物思いに沈んで峰の白雲を眺めていたが、紅葉の赤へと心を染め変えたと、色々な思いを振り捨てた心情を比喩的に描く。旅の途次で、迷い躊躇していたが、それを振り切ってまた出立する様子とも解することができようか。

五〇　のこるべき秋のかたみのためなれやまだあをばなる枝のひとむら

【校異】なし
【他文献】なし
【現代語訳】秋が過ぎた後も残るであろう形見のためなのだろうか、まだ青葉の、枝の一叢である。
【本歌】
唐錦枝にひとむらのこれるは秋のかたみをたたぬなりけり
（『拾遺集』巻四、冬、二二〇、遍照）
みやこにはまだ青葉にてみしかどももみぢちりしく白川のせき
（『千載集』巻五、秋下、三六五、源頼政）

【語釈】
○まだあをばなる枝のひとむら―紅葉せず、まだ青葉のままのひとかたまりの葉が枝にあること。

【補説】田村柳壹氏は、当該歌を「二首の歌を本歌にするという詠み方も試みている」例に挙げ、「雅経詠は、発想の上では（A）〔遍照歌…稿者注〕の歌に依拠して、すっかり紅葉した木々の中にあって、まだ枝に一群だけ残る青葉は冬になった時に秋の形見となるためのものであろうかとし、本歌の季節を移行することで趣向上に新味を加え、更に（B）〔頼政歌…稿者注〕の歌から『まだ青葉にて』を取り、これを『まだ青葉なる枝のひとむら』という秀句的表現としている。（A）が冬になっても残っている『紅葉』に趣向上の珍しさを求めただけであるのに対し、雅経詠は秋の『紅葉』の中に一群だけ残る『青葉』を取り上げることによって、冬になっても一群残る『紅葉』を詠んだ本歌の世界へと想像を及ぼさせるという表現をとっており、以上の点で新しさのある歌であると言えよう。」と述べる。雅経は本歌取をする際、本歌から時期をずらして詠む方法を複数回試みており、ここもその一例と考えられる。[9]

(9) このような詠み方は、『鳥羽百首』において、前稿の範囲内にはないが、本稿ではほかに五一・五六・五八・五九が類似の例。それぞれの補説を参照されたい。

五一　おもへどもいろはみやこにとほければあだちのまゆみおとにのみこそ

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】想像しても、その色は都から遠くて見ることができないので、安達の檀の紅葉は評判に聞くばかりである。

【本歌】

せきこゆる人にとはばやみちのくのあだちのまゆみもみぢしにきや

（『金葉集』三奏本、巻三、秋、二四四、藤原頼宗・『詞花集』巻三、秋、一三〇・『入道右大臣集』九）

【語釈】

○いろはみやこにとほければ―安達は都から遠いため、紅葉の色を想像することしかできない意。見ることのできない「いろ」と結句の聞こえてくる「おと」とが対比されている。

○あだちのまゆみ―「あだち」は陸奥国の歌枕。現在の福島県二本松市のあたり。「あだちのまゆみ」は安達産の檀の木で作った弓をいうことが多いが、ここでは安達原に生えている檀。檀はニシキギ科の落葉樹。ただし、結句「おと」は矢を射る時の弓の音を連想させるか。「まゆみ」と「音」をともに詠みこんだ作は他に見られない。

【補説】当該歌以前に安達の檀を弓としてではなく植物として、紅葉を詠んだのは「せきこゆる」歌しかなく、これを本歌としているのではないかと思われる。ともに安達が遠いため、紅葉を実地で見ることができない心情を歌う。「せきこゆる」歌では紅葉したか否かが気になるので旅人にたずねたいと詠むが、当該歌はその後の様子を詠んだとも解され、既に紅葉したという評判を聞いて想像をめぐらせる思いを詠む。

五二　ちりつもることをかねてやたにがはのかげよりうつすみねのもみぢ葉

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】散り積もることをあらかじめ知っているのだろうか、谷川の物蔭から水面に姿を映している峰の紅葉である。

【語釈】

○かねてや―「かねて」はあらかじめ、の意。この句がかかる語が示されていない。

【補説】谷川の水面に紅葉が映っている様子を、紅葉がいずれは自分が散って河面を覆うことを知っていて、その先取りとして意図的に姿を映しているかのように捉えた理知的な作。

五三　あはれさてこれはかぎりのいろなれや秋もすゑばのはじのむらだち

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】ああ、それではこれが最後の色なのだろうか、秋も末になって末葉が紅葉している櫨の群立ちである。

【参考歌】

ながむべき秋もすゑばになりゆけば心ぼそしやありあけの月

（『唯心房集』一〇八）

【語釈】
○これはかぎり―これが最後。間もなく秋が去り、紅葉が散り果てる直前の景。
○秋もすゑばの―「末」は「(秋も)末」と「末(葉)」を掛ける。「末葉」は草木の末端の葉。「秋もすゑば」という表現の作例は少なく、当該歌以前には参考歌欄に示した寂然歌にしか見られない。
○はじのむらだち―「はじ」はヤマハゼ。ウルシ科の落葉小高木。秋の紅葉が美しい。「むらだち」は一群になって立つこと。杉や松などに用いることが多く、「はじのむらだち」の作例は当該歌以前にはなく、その後も一例にしか見られない。
【補説】 秋の末、他の紅葉は皆散ってしまった中で、一群の櫨の紅葉した末葉だけが残っている景を詠む。散り残った紅葉を見つけ、行く秋を惜しむ気持ちを詠む。

五四　おもふよりかねてかつちるながめかなたつたのやまの秋かぜのいろ

【校異】 なし
【他文献】 なし
【現代語訳】 立田の山の秋風が紅葉を吹き散らす赤い色を思うと、実際に散るより先に散り始める眺めであるよ。
【本歌】
さくらばなさかばちりなんとおもふよりかねてもかぜのいとはしきかな
(『後拾遺集』巻一、春上、八一、永源)
【語釈】
○おもふより―上句と下句が倒置になっていると解した。従って、「おもふ」のは「たつたのやまの秋かぜのいろ」。
○かねてかつちる―「かねて」は前もっての意。「かつ」も事前にの意で、ほぼ同義の語を重ねた。
○ながめかな―新古今時代に流行した表現。特に雅経と慈円に多く、ともに六首に用いている。雅経の作例は、当該歌のほか、『明日香井集』六〇・九一・八四九・八六二・一五九六で、本百首に三例と集中している。
○たつたのやま―大和国の歌枕。現在の奈良県生駒郡三郷町と大阪府との境にある山。紅葉の名所。
○秋かぜのいろ―秋風が紅葉を吹き散らしている赤い色。当該歌以前には作例がない。
【補説】 田村柳壹氏は、「本歌の趣向を拡張・深化させながら一首を構成しつつ、秀句的表現を開拓している歌」の例に挙げ、「たつたのやまの秋かぜのいろ」を秀句的表現と指摘し、「本歌がやがて桜花を散らせる『風』を『いとはしき』ものとしているのに対し、雅経詠は紅葉の散ることについての作者の主観を直叙せず、視覚的にとらえられている『秋風の色』によって、やがて散るであろう紅葉の状景を想像するという詠み方をしており」「言わば、心の眼で見ているがごとき表現としている」と述べており、首肯される。季節の変化を先取りする詠法は三六・五二にも見られたが、いずれからも去る季節を惜しむ心情は読み取れない。当該歌でも、紅葉が散ることを惜しむ気持ちは感じられず、想像の中での風に舞う紅葉の美しさが印象に残る。

雪

五五　むらしぐれあとよりはれし山のはのやがてくもるやゆきげなるらん

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】村時雨が降った後晴れた山の端がすぐにまた曇るのは、雪模様なのだろう。

【語釈】

○むらしぐれ―ひとしきり強く降って通り過ぎる時雨。

○やがてくもる―すぐにまた曇る。この表現を用いた歌は当該歌以外にない。

○ゆきげなるらん―「ゆきげ」は「雪気」で、雪が降りだしそうな空模様の意。

【補説】気象の変化を詠むが、村時雨、晴れ、曇る、雪気と素材を詰め込み過ぎており、変化をたどることに終始している。同様の例は、『明日香井集』一三四・一九六・二五二にも見られるが、これらは建仁元年（一二〇一）までに詠まれたもので、建久九年（一一九八）から承久三年（一二二一）まで二四年間続く雅経の歌歴の初期の作に限られる。

五六　あさとあくるながめはしもの心ちしてまづにはならすうすゆきのいろ

【校異】まづにはならす―松にはならす（書A）

【他文献】なし

【現代語訳】冬の朝、戸を開けると眺めは霜が置いたような感じがして、まず庭を慣れさせている薄雪の色である。

【参考歌】

ひととせをながめつくせるあさ戸いでに薄雪こほるさびしさのはて

（『拾遺愚草』八四六・『六百番歌合』五四七）

【語釈】

○あさとあくる―「あさと」は、朝、起きて開ける戸。

○ながめはしもの心ちして―庭がまるで霜に覆われたかのような眺めになっていることをいう。「ながめはしもの」という表現は他に見られない。

○まづにはならす―「ならす」は「慣らす」で慣れさせる意。雪がうっすらと庭を覆うことから始め、いずれは一面を銀世界にしていく、その第一歩。うっすらと白くなっているので、雪が積もったのではなく、霜が置いたように見える。「まづにはならす」「にはならす」ともに他に作例はない。

○うすゆきのいろ―雪がうっすらと地面を覆った白い色。他に作例はない。

【補説】うっすらと地面を覆った雪景色が、雪が少ないために霜が置いたように見えるという作。「まづにはならす」により、地面だけが白くなっていて、他の物にはまだ積もっていないことが知られる。本格的な雪の季節を迎える前の初冬の景を描いている。

田村柳壹氏は、参考歌欄に示した定家歌を挙げ、「雅経は本百首詠作以前に『六百番歌合』を披見し、これを学ぶ機会があった可能性が高いように思われる」と述べる。雅経の念頭には、定家歌があったのであろう。ともに朝、戸を開けて発見した薄雪を詠むが、定家歌の一年も終わりに近い頃の凍った薄雪を、雅経歌では初冬のおそらくは初雪に転じている。雅経の『六百番歌合』摂取については三一でも指摘した。田村氏が検討

しているのは『鳥羽百首』のみであるが、ほかに『正治後度百首』に五例（『明日香井集』一〇二・一一三・一二四・一四六・一七六）、『千五百番歌合』に二例（同二三五・二八三）、『建保四年院百首』に一例（同七七〇）見られ、約二〇年にわたって、雅経は『六百番歌合』から摂取していたと考えられる。

五七　わけなれしこの葉のうへに雪つみてあとたえはつる秋のふるさと

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　分けて行くことに慣れていた木の葉の上に雪が降り積もって、往来の跡がすっかり絶えた秋のふるさとである。

【参考歌】

ふかくさのうづらのとこもけふよりやいとどむなしき秋のふるさと

（『秋篠月清集』五三九）

ころもうつそでにくだくるしらつゆのちぢにかなしき秋のふるさと

（『秋篠月清集』六五五）

【語釈】

○わけなれし―冬になるまでは、木々を分けて行き来することに慣れていた。

○秋のふるさと―過ぎ去ってしまった秋にとっての故郷。

【補説】　田村柳壹氏は、三一歌の補説で引用した、雅経が新風歌人の作から表現を摂取した例の一つとして当該歌と参考歌欄に示した良経歌二首を挙げて、『秋の故郷』はおそらくは、良経の影響による表現であろう。『秋の故郷』のバリエーションとしては『春の故郷』という表現もあり、『無名抄』によれば、後鳥羽院歌壇における新風和歌を特徴付ける表現として、長明を驚嘆させた秀句のひとつである。『秋の故郷』も同質の当代的な秀句表現であったとみてよかろう」と述べている。雅経は「秋の故郷」という表現を、当該歌のほか三首（『明日香井集』二五三・三五一・一二二〇）に詠んでいる。当該歌以前の作例は、参考歌欄に示した良経歌二首しかなく、雅経は良経歌から学んだと思われる。ただし、良経歌がいずれも秋の歌である（ただし、五三九は秋の最後の歌）のに対して、雅経歌は、当該歌・二五三・三五一が冬の歌で、秋が去った後の寂しい景を描いている。

五八　よはさゆるふゆのあしたにながむればまづみやこにはをのやまの雪

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　夜中に冷え込んだ冬の朝に外を眺めてみると、まず都には小野山に降る雪が見える。

【本歌】

みやこにもはつゆきふればをの山のまきのすみがまたきまさるらん

（『後拾遺集』巻六、冬、四〇一、相模）

【語釈】

○よはさゆる―「よは」は「夜は」とも解せるが、「夜半」と考えた。「よはさゆる」という表現の作例は他に見られない。

○をのやま―山城国の歌枕。現在の京都市左京区。小野山の雪を詠んだ作は当該歌以前に複数見られるが、「をのやまの雪」という表現の作例

は他に見られない。

【補説】 相模歌を本歌とするか。本歌は、都にも初雪が降ったので、小野山の真木を炭に焼く竈は燃えまさっているだろうと、小野山の炭竈を思いやる。一方雅経歌は本歌より少し前の時期を設定し、夜中の寒さが厳しかった翌朝、都にほど近い小野山に雪が降っているのが見えると詠む。間もなく都にも雪が降るのであろうことを予測させる。

五九　みよしのゝいはのかけ道あとたえて人やはかよふ雪ふかきころ

【校異】 なし

【他文献】 なし

【現代語訳】 吉野の岩にかけた道は足跡が絶えて、人が通うことなどあろうか、この雪深い頃に。

【本歌】

世にふればうさこそまされみよしののいはのかけみちふみならしてむ（『古今集』巻一八、雑下、九五一、よみ人しらず）

【語釈】

○いはのかけ道―崖に木材を棚のようにかけ渡して作った道。雅経は他に三首（『明日香井集』九三、八六七、一三七九）に詠んでいる。他に『拾玉集』に四例、『後鳥羽院御集』に三例、『拾遺愚草』と『如願法師集』に二例見られるなど、新古今時代に流行した表現。雅経は、他の三首では、岩のかけ道を進む困難を詠んでいる。

【補説】 本歌がこの世で生きているつらさから逃れるために岩のかけ道を踏みしめて入って行こうという述懐歌であるのに対して、雅経歌は雪が深く積もったために人の行き来が途絶えたかけ道を詠む。本歌で詠まれている人物が本当に岩のかけ道を通って吉野に入った後の状況を描いているとも解される。そうであるとすれば、自らの意志で吉野山に入った後、雪に閉ざされて誰一人訪れる人もない人物の孤独を詠んでいることになる。

六〇　ほどもなくあはれもふかきながめかなこまかにつもる夕ぐれのゆき

【校異】 こまかにつもる―こまつにつもる（書B）

【他文献】 なし

【現代語訳】 あっという間に趣深い眺めを作り出したなあ。繊細で美しく積もった夕暮の雪は。

【語釈】

○ながめかな―五四に既出。

○こまかにつもる―「こまかに」はここでは繊細で美しいことをいう。「こまかにつもる」という表現の作例は、当該歌以前には見られない。

○夕ぐれのゆき―夕暮れ時に降っている雪。これも当該歌以前の作例はない。

【補説】 夕暮れ時、雪が降りだしたと思う間もなく、うっすらと積もった様子の美しさを歌う。夕方で、気温が下がっていくため、粉雪となって積もるのであろう。「夕ぐれのゆき」という雅経が創出したかと思われる表現が、眼目となっているのではないだろうか。

六一　ときはなるまつのみどりもうづもれてなにのこずゑの雪のむらだ

ち

【校異】 なにのこずゑ―なにの木の（書A）

【他文献】 なし

【現代語訳】 常緑である松の緑色も雪に埋もれて、何の木の梢なのかと思う雪の中の群立ちである。

【本歌】

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

（『古今集』巻一、春上、二四、源宗于）

【参考歌】

たまがきはあけもみどりもうづもれてゆきおもしろきまつのをの山

（『山家集』五三七）

【語釈】

○なにのこずゑの―何の木の梢なのかわからない。他に作例がない。

○雪のむらだち―「むらだち」は一群になって立つ意。雪の中の（松の）群立ちを約めて表現したもので、当該歌以前の作例はない。

【補説】 田村柳壹氏は「本歌は常磐の松までも春が来ると、一段と緑の色がまさってくるという、知的趣向に中心のある観念的な歌である。一方、雅経の歌は、本歌の初二句をそのままの形で取り、常磐の松さえも冬の今は雪に埋もれて、一面に群がり立つ雪の梢はどれが何の木であるのか判別し難いと詠んでいる。雅経の歌は、趣向の上では本歌の『常磐なる松』という前提条件を覆しており、また、本歌から取った上二句では春が来ると、一入まさる松の『緑』をイメージに浮かび上らせ、これを下句の雪の『白』と対比させ、色彩の対照による印象を鮮明なものとしている。更に、下句『何の梢の雪の群立ち』という詞続きも、『の』を多用することによって緊縮した表現となっている」と指摘する。当該歌は、参考歌欄に示した西行歌と「みどりもうづもれて」という表現が共通しており、西行歌も念頭にあったかと考えられる。西行歌では松尾大社の玉垣の朱と松の緑が雪に埋もれていると詠むのを、雅経歌では松の緑に焦点を当てた。一面の雪に覆われた景を詠む点では共通するが、場を転じ、西行歌とは異なる趣となっていると思われる。

六二　たれかみるよぶかくあくるまきのとに雪よりしらむ庭のあけぼの

【校異】 なし

【他文献】 なし

【現代語訳】 誰が見ていようか、夜も深い頃に開ける真木の戸の前に広がる雪から白々と明けてくる曙であるかのような庭の光景を。

【参考歌】

むめがかをほかへやかぜのさそはまし夜ぶかく明けぬまきのとならん

（『文治三年女御入内和歌』四一、藤原兼実・『玄玉集』巻六・草樹歌上、四五九）

雲ふかきみねのあさけのいかならんまきのとしらむ雪のひかりに

（『六百番歌合』五五一、藤原良経・『秋篠月清集』三四五・『新後撰集』巻六、冬、五一七）

【語釈】

○たれかみる―係助詞「か」は疑問とも反語とも解せるが、反語か。いずれにしても、「たれかみる」と言っている人物は、以下の景を見ていない。

○よぶかくあくる―「夜深し」は夜が深い、夜明けまでまだ間があるさま。「よぶかくあく」という表現の作例は、当該歌と参考歌欄に示した

兼実歌以外に見られない。
○まきのと―杉や檜で作った戸。寝ている部屋の戸。
○雪よりしらむ―積もった雪が明るく見える。雪明りをいう。この表現の作例は、当該歌以前にはない。
○庭のあけぼの―「あけぼの」は夜がほのぼのと明け始めようとする頃。第二句の「夜深し」よりも後の時間帯なので、時間が経過したか、実際の時刻は曙の頃ではないかのいずれかとなる。初句から、実際にはこの景を見ていないことがわかるので、時間が経過したとは考えにくく、雪が明るいため、庭が曙になったかのように見えることをいう。この表現の作例の当該歌以前には見られない。
【補説】 田村柳壹氏は、参考歌欄に示した良経歌を挙げ、『六百番歌合』から学んだ可能性を指摘している。しかし、二首は「真木の戸」「白む」「雪」という語が共通して詠まれており、また「いかならん」「たれかみる」と想像上の景を詠む点は共通しているものの、良経歌は「朝明」で雅経歌よりも遅い時分を詠む。また、良経歌では「雪のひかり」すなわち朝日が雪に反射した光を詠むが、雅経歌では雪明りを詠んでいて景が異なる上、峰と庭という場の違いもある。影響関係があるとすれば、良経歌で用いられた語から想を得て、良経歌とは異なる景を描いたことになろうか。夜更けなのに曙かと思わせるような雪明りは幻想的である。

六三　このごろはがけのかよひぢこゝろせよふぶきにこゆるこしのたび人

【校異】 なし
【他文献】 なし
【現代語訳】 今ごろの時期は、崖の通い路を行く時は注意しなさい、吹雪の中を越えて行く越の国の旅人よ。
【参考歌】
跡絶えて誰か住むらんとふ門をあな卯花の陰の通路
（『新明題集』巻二、夏、一一九九、中院通村）
あだにちる花に嵐をみしよりもふぶきにこゆるしがのやま道
（『建仁元年十首和歌』一九一、雅経）
【語釈】
○がけのかよひぢ―『新編国歌大観』では「かげのかよひぢ」と濁点を付す。「かけのかよひち」の作例は、当該歌以外には参考歌欄に示した通村歌しか見られず、これは内容からも「卯花隠路」という題からも「陰の通ひ路」であることが明白である。しかし、雅経歌では「陰」とすると何の蔭であるか明確ではなく、また、吹雪の中を越えている旅人に注意を呼び掛けていることから「崖」と解した。
○ふぶきにこゆる―吹雪の中を越えて行く。「ふぶきにこゆ」という表現の作例は、当該歌以外には参考歌欄に示した雅経歌のみであるが、『明日香井集』には見えない。
○こしのたび人―越の国を越えて行く旅人。越の国は、越前・越中・越後の三国。現在の、福井・石川・富山・新潟。「越の白山（白嶺とも）」の作例は多いが、その多くが「雪」を詠み込む。当該歌でも明示はされていないが、越えているのは「越の白山」であろうか。
【補説】 吹雪の中を行く旅の危険を詠み、臨場感がある。雅経は、現在知られるだけで、四回京都と鎌倉を往復している。一度目は、時期は不明であるが、文治五年（一一八九）年雅経二〇際の時に父頼経が伊豆に流された後に下向して建久八年（一一九七）二八歳の時に帰洛、

二度目は建仁元年（一二〇一）三二歳の二月一八日以後出立して同年三月二〇日帰洛、三度目は建暦元年（一二一一）九月二四日以降出立して一〇月二二日以前帰洛（この時は鴨長明を伴っている）、四度目は建保三年（一二一五）一〇月一日頃出立して帰洛時期は不明、用件は不明だが順徳天皇の使いであった。ほかに、『明日香井集』一三六六により、年次不明だが九月十三夜に鈴鹿の関にいた経験があることも知られる。このように豊富な旅の経験はおそらく作歌に反映されていると思われ、その一つに山越えを詠んだ歌の多さがある。それらには、つらさや、不安、危険性などを感じさせる作が多く（『明日香井集』九三・一六八・八六七・九六五・一三七九など）、当該歌もその一例と考えたい。

六四　いはしろのをのへのまつにゆきふればかぜのおとまでむすぼゝれつゝ

【校異】なし

【他文献】なし

【現代語訳】岩代の尾上の松に雪が降ると、風の音までが晴れやらない感じがしている。

【本歌】

かくとだにまだいはしろのむすびまつむすぼほれたる我がこころかな

（『金葉集』三奏本、巻七、恋上、三九六、源頭国・『金葉集』二度本、巻七、恋上、三七八）

【語釈】

○いはしろの―「いはしろ」は紀伊国の歌枕。現在の和歌山県日高郡南部町岩代。

○むすぼゝれつゝ―「むすぼほる」は、心が晴れない意。ここでは、自分の心が晴れず、風の音も鬱屈したように聞こえること。「むすぼほれつつ」という表現を雅経は他に三首に用いている（『明日香井集』一四一・六一三・九一三）。音が「むすぼほる」と詠む例は少ないが、雅経は一四一で波の音に「むすぼほる」の語を用いている。

【補説】『金葉集』歌を本歌とするか。本歌では「結び松」は「むすぼほる」の語を導き、鬱屈した恋の思いを詠むが、雅経歌では自然詠に転じ、雪が降って晴れない思いでいると、風の音も同じように鬱屈した感じに聞こえると詠むもので、三二で五月雨の頃に鐘の音が湿った感じに聞こえると詠むのと類似の発想である。